



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第8号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2010-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73493
Type	journal
File Information	DRFmonthly_8.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第8号

No. 8 September, 2010

【特集1】IFLAレポート

【特集2】WSレポート

【その他の記事】オープンアクセスウィーク(OAW)に参加しよう！

DRF参加機関紹介～鳥取大学

【特別付録】1) OA△スタンド 2) DRF OAロゴ

【特集1】IFLAレポート

IFLA2010参加・サテライトミーティング発表報告

杉田いづみ(国立情報学研究所)



IFLA会場

IFLA(International Federation of Library Association)は世界の図書館協会の連合体で、毎年開かれるAnnual Meetingは図書館界最大のイベント。2010年はメインテーマを”Open access to knowledge -Promoting sustainable progress-”とし、スウェーデンのゴーセンバークで8月10日～15日に開催された。

128カ国から3000人以上が参加。80以上の口頭発表、200以上のポスター発表があった。<http://www.ifla.org/en/ifla76>
IFLA2010の15のサテライトミーティングの1つ”Open Access and the Changing Role of Libraries”における発表を主目的とし、サテライトミーティングがIFLA本会議と同じ開催地であったことから、本会議にも2日間参加した。NII(事業系)からの参加は、2006年のSeoul大会以来4年ぶりとなった。8月のスウェーデンは秋の気候。特にゴーセンバークのある西海岸は雨が降りやすいとのこと、滞在中晴れたのは2日だけだった。伝統的な建物とガラスを多用したモダンな建物がミックスされた美しい港街。街のどこにいてもカモメの音が聞こえ、至る所に花の寄せ植えがセンス良くディスプレイされていた。

<スケジュール>

7 August 2010(青木次長, 杉田)

成田発(9:35)フランクフルト経由でゴーセンバークLandvetter空港着(18:45)。日本との時差は-7時間。乗り換え時間を含めた所要時間:16時間。ホテル着:現地時間の8/7 20:00頃

8 August 2010(青木次長, 杉田)

サテライトミーティングおよびIFLA本体の会場を下見。発表練習。

9 August 2010(青木次長, 蔵川先生, 杉田)

会場: School of Business, Economics and Law, Gothenburg University

プログラム: 9:00-17:00

IFLAプレジデントのEllen Tise氏の基調講演を皮切りに、3セッション13本の発表があった。

- Library cooperation in supporting Open Access, national and international initiatives
- Open Access and new roles for research libraries and librarians
- Open Access and Open Source; metadata, catalogues and software

<http://www.kb.se/aktuellt/utbildningar/2010/Open-Access-and-the-Changing-Role-of-Libraries>

このうち、1つ目のセッションで発表する機会をいただいた。発表は好評を得ることができ、時間内の質疑のほか、終了後にも多くの質問・コメントをいただくことができた。もっとも新鮮だったのは、論文等の研究成果だけではなく、目録データ(CERN, スウェーデン国立図書館)や図書館システムのアプリケーションをオープンアクセス化しようという発表があったことだった。

10 August 2010(青木次長, 蔵川先生, 杉田)

IFLA Pre-registration: 受付に日本人スタッフ(Ms Akiko Nakagaki, クルースベリ州議会図書館)がいて助かった。EAJRSに例年参加しているとのこと。

IFLA本体開始の前日は、76種の専門分野のStanding Committee会議と一般参加者向けのLibrary Visit Tourが同時開催された。

11:30- Standing Committee会議の一つ“Academic and Research Libraries Section”に参加。委員会メンバー以外でも自由に陪席可能だった。Agendaが手元になかったため詳細は不明であるが、今後の活動のプライオリティや、スポンサーとなるサテライトミーティングの在り方を検討していた。

13:30- Library Visit: 41種類の図書館見学ツアーが設定されていた。このうち、ゴーセンバーク大学中央図書館見学ツアーに参加。館内自由閲覧後、電子図書館プロジェクトのデモンストレーション、館内ツアーがあった。

20:00 Night Spot: 会期中毎日、ゴーセンバーク市立図書館を会場として開催される自由参加の懇親会に参加。

11 August 2010(青木次長, 蔵川先生, 杉田)

11:00- オープニングセレモニー: IFLA2010のローカルオーガナイザーAgneta Olsson氏、IFLAプレジデントのEllen Tise氏の挨拶、スウェーデンのアーティストによる歌唱等があった。最後に、ロックグループによるABBA(スウェーデン出身)のディスコミュージックがかかり、会場総立ちの盛り上がりとなった。NDL長尾館長以下6名の参加者と挨拶、鶴見大・長塚先生とStanding Committeeについて意見交換。

14:00- Swedish Libraryコーナーにて、オープンアクセスについてのミニトークセッションに参加(蔵川先生, 杉田)。終了後、Jan Hagerlid氏、Anders Soderback氏と目録データのOCLCへの提供ポリシーについて意見交換。

青木次長: Congress track 1: Open access and digital resources の Art library, Statistics and Evaluationや, Information literacy with Reference and information Servicesなどに参加。

16:30- ベンダーによる展示・ポスター発表見学。

12-13 August 2010(青木次長, 杉田)

ゴーセンバーク発(12:15)ミュンヘン経由で成田着(10:15)。蔵川先生は最終日8/15まで滞在。

1) サテライトミーティングにおける発表

<発表タイトル>

OA as a driving force to make library services more patron centered: The projected future of Japanese library landscape (オープンアクセス活動によって、図書館サービスがいかに利用者寄りになってきたか: 日本の図書館の将来構想)

<内容>

NIIの簡単な紹介、日本における機関リポジトリの状況説明の後、OA活動によって図書館がいかに変わってきているかの具体的な事例を紹介。次にNIIの学術機関リポジトリ構築連携支援事業第3期、SPARC Japanとの連携活動について紹介。最後に“Circle of Gift”の世界の復活、“Ship of OA”に象徴される新しい学術コミュニケーション構築の可能性について言及。

<質疑応答:>

Q: 素晴らしい発表をありがとう。ところで日本がそのように成功した要因は何か。(eIFL・プロジェクトマネージャ)

A: 個人的な意見だが、2つ要因があると思う。1つは文科省のレポートでIRの必要性が述べられていること。もう1つはNIIがリーディングプロジェクトにファンドしたこと。と回答。もう1つ、一番重要なのに言い忘れたのが“リポジトリマネージャたちの情熱”。

<セッション終了後の質疑応答>

Q: 日本のIRはOpenDOARなどのリストに掲載されていないケースも多いのに、どうやってIRの存在を知り、ハーベストしているの?(スイス・Globethics.net・プロジェクトマネージャ)

A: 独自に申請してもらっている。

Q: JAIROのメタデータをハーベストすることはできるか?

A: JAIROはサービスパロバイダであって、データプロバイダではない。API(Open Search, OpenURL)を公開する予定なので、公開したら連絡する。

その他、6~7名の参加者から「おもしろかった」「研究者とコミットすることが一番大事という点に共感する」「人は減ってサービスは増えるよね。でもやるしかないよね」等々、コメントいただいた。

2) Standing Committee

サテライトミーティングや本会議のテーマ設定は、Standing Committeeから提案を出し、場合によっては複数のStanding Committeeが合同で企画を立てることもあるとのこと。ちなみに“Open Access and the Changing Role of Libraries”のスポンサーは“Information Technology Section”である。実質的にホストした(お金と人手)のはコスポンサーのスウェーデン国立図書館で、ゴーセンバーク大学図書館との共催だった。Standing Committeeは加盟館の選挙でメンバーが選ばれる。「NIIから是非」と会う人ごとに言われた。



街中にIFLAの看板

3) ゴーセンバーク大学図書館 <http://www.ub.gu.se/>

大学図書館全体の職員数は75名、うち30数名が中央館勤務。ガラスを多用したモダンな建物、木製の書架、利用者用の机や椅子はいわゆる北欧スタイルのセンスの良いものだった。スタッフルームは最上階のもっとも採光の良い場所で、個室もしくはパーテーションで区切られた個別スペースがあり充実した仕事環境だった。予算の75%は電子リソースの購入に充てている。年々比率は高くなっている。

見学終了後に電子ジャーナルの購読について意見交換。電子ジャーナルは非常に高いと感じているが、教員が求める限り、他の予算を抑えても電子リソースをどんどん導入している。予算的には厳しい。スウェーデン国立図書館との連携の下コンソーシアムを組んでいる。日本はどうかという質問があり、購読できない大学が出始めていること、国立と公立私立の個別のコンソーシアムを一つにまとめようとしていることを紹介。



ゴーセンバーク大学本部

4) ゴーセンバーク市立図書館 <http://www.stadsbiblioteket.nu/>

ゴーセンバーク市立図書館は美術館や劇場の集まる文教地区の一角にあり、通常の図書館としてのスペース以外に、入口付近には市民活動の場所(当日は合唱サークルらしきグループが使用していた)やカフェ、地下にはバーが設けられており、市民の集いの場となっていた。

ナイトスポットでは、獨協大学の教員である井上氏と意見交換。井上氏は20年来研究者としてIFLAに参加しており、“Library Theory and Research”の委員のメンバーでもあるとのこと。IFLAが国連に似た政治の場であること、日本からの継続的・積極的参加が求められるといった話を聞いた。スウェーデン国立図書館のJan Hagerlid氏とOCLCとの折衝のプロセスについて意見交換。担当者とのミーティングを設定していただいた。

5) OCLCへのデータ提供に関する意見交換

最初にOCLCから話があったのは2006年。国立図書館の蔵書について650万件のレコードをテスト的にOCLCに提供した。テスト期間は2006年-2008年。

スウェーデン国立図書館は、むしろオープンアクセス活動の一環として、目録情報をオープンにすることを考えている。オープンした目録情報をだれが使うのか。それは誰が使ってもいい。OCLCが使うのも一つのデータの活かし方だろう。

その他: ノーベル賞受賞論文のオープンアクセスプロジェクト(スウェーデン国立図書館のプロジェクト)について意見交換。テストプロジェクトが終了し、レポートが出たので読んでほしい。本番プロジェクトにあたっては資金が必要。課題としては受賞者からの許諾。京都大学のようにリポジトリで公開している場合はリンクをするというのはもちろんいいアイデアだろう。

※写真は以下のサイトで公開中。

<http://picasaweb.google.com/izu33mimi55/>

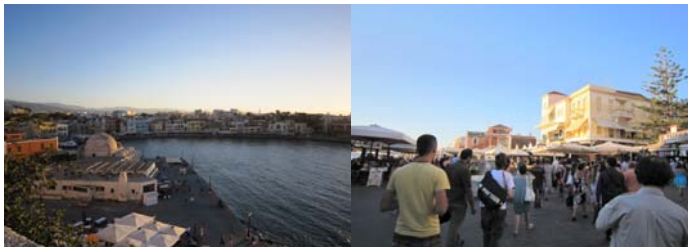
以上

特別な一部だけでない、あらゆる活動の積極的な発信を

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
佐藤翔

IFLA Satellite Pre-Conference “Open Access to Science Information: Trends, Models and Strategies for Libraries” (IFLA-Sat-Chania) は、ギリシア・クレタ島の港町、ハニアで2010年8月6日から8日にかけて開催されました。主催はIFLAのScience and Technology Libraries SectionとHealth and Biosciences Sectionで、オープンアクセス(OA)に関して図書館員と学術コミュニケーションに関わる他のステークホルダーの対話を図ることを目的とする会議です。

開催地であるハニアはエーゲ海に面し、「東のヴェネツィア」とも呼ばれる観光地です。人口は6万人を超える程度ですが、夏には多くの観光客が訪れ、会議期間中の市街は常にヨーロッパやアメリカからの来訪者で賑わっていました。



ハニア市の港の風景

観光客でにぎわう市街

会場となったMediterranean Agronomic Institute of Chania (MAICh)は地中海農業に関する大学院教育・研究を行う機関ですが、写真の通り南国風の風光明媚な建物です。参加者数は40名程度で、ハニアの雰囲気を受けてか進行も必ずしもプログラムに捉われない、終始アットホームな会議となりました。

しかし規模に比して参加者の構成は多様で、南米を除く4大陸・20カ国から、大学図書館員、研究者、学術出版者、ウィキメディア財団など様々な立場からの発表と意見交換が行われました。発表の内容も研究発表だけでなく実践報告・事例紹介から今後のOAに関する提言など多岐に渡りました。日本からは佐藤がCSI委託事業の一つ、ZS projectについて発表したほか、2日目の最終セッションのチェアを筑波大学大学院図書館情報メディア研究科の逸村先生が務められました(ZSプロジェクトの発表詳細については佐藤のブログ参照：<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20100812/1281622222>)。



発表会場
MAIChカンファレンスセンター

コーヒーブレイクの様子



発表のあった会議室

オープニングセレモニーの様子



発表する佐藤

幾つか印象的な発表を紹介すると、1日目「ベストプラクティスとマネージメント」セッションでは北米・ラトガース大学のMullen氏から、「オープンアクセスと大学図書館のパブリックサービス：レファレンスとインストラクションの役割」と題し、リポジトリ担当だけではなく全ての図書館サービスの中でOAを浸透させる必要性、特に利用者サービスの前線であるレファレンスとインストラクションにOAを戦略的に取り入れること等が提言されました。2日目の「サービスと技術」セッションでは英国・ノッティンガム大学のTate氏からイギリスの機関リポジトリをサポートする複数のプロジェクトについて紹介があり、参加機関同士でのボランティア取組など、DRFの活動にも大いに関わると考えられる内容でした。その他にも興味深い発表は多くありましたが、紙数の関係もありここでは紹介しきれません。詳しくは佐藤のブログをご確認いただければ幸いです

(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20100819/1282242542>)。

質疑応答時だけでなく、休憩や昼食の間にもそれぞれの発表内容や自分たちの国の状況について盛んに意見・情報の交換が行われていました。DRFIC2009などでも話題になったことですが、あらためて感じるのはどこの国・機関も似たような悩みを持ち、それぞれのアプローチで取り組みつつも、参考にできるような互いの情報を欲しているということです。参加者の中にはまだ機関リポジトリを設置し始めたばかりの大学、あるいは未設置の大学すらありました。そうした参加者でも自分たちの取組を国際的な場で紹介する態度があり、またその取り組みに興味を持つ人との間で議論が起こる、ということは注目すべきだと思います。日本のOAの情報も、特別な一部のプロジェクトだけではなく、あらゆる大学・機関の活動や置かれた状況について国際的な場で発信し、意見を交わすことがお互いにとって有益なのではないでしょうか。



最終日、エーゲ海とギリシアビール

【特集2】ワークショップレポート

9月13日 信州地域共同リポジトリ(仮称)キックオフミーティング及びDRF/Share-Shinshu(信州大学)

緑が美しく清涼な空気に包まれた信州大学で、信州地域共同リポジトリ(仮称)キックオフミーティング及びDRF/Share-Shinshu 地域ワークショップ(甲信越地区)が開催されました。参加者は18機関31名でした。

前半のキックオフミーティングでは信州大学が中心となって計画している共同リポジトリについて、その趣旨や実務の説明があり、最後に質疑応答を通して参加者はより具体的なイメージが描けた様子でした。

後半のワークショップでは概論を聴いて機関リポジトリや共同リポジトリの知識を深め、実務の講義で具体的な業務の流れや注意点を確認し、事例報告で各自が不安に思っている部分を少し解消することができるメニューでした。

各話者がそれぞれ「人とのつながり」といったことを言葉を変えて言われていたのが印象的でした。共同リポジトリを立ち上げることで、参加機関同士の交流が進み、信州地区全体の図書館界の活性化につながることを期待します。



機関リポジトリ概論 (日本大学文理学部准教授 小山憲司)
→ 機関リポジトリは図書館だけが頑張るのではなく、大学等の設置主体が全体で構築していくものだとのお話に、改めて忘れてはならない視点だと思いました。



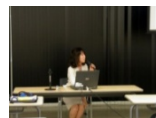
共同リポジトリ概論 (広島大学図書館 尾崎文代)
→ 一言に共同リポジトリと言ってもシステムや運用の形態が様々あることに驚かされました。共同リポジトリによって中小規模の機関にも可能性が広がると期待できるお話でした。



リポジトリの実務(1)コンテンツの収集
(信州大学附属図書館 岩井雅史)
→ コンテンツの収集について、特にアプローチの方法を詳しく述べておられたのが参加者にとって非常に参考になったと思います。



リポジトリの実務(2)著作権
(山形大学小白川図書館 津田ひろ子)
→ 著作権について大変わかりやすい講義内容でした。また、参加者に見てもらいたいWebページの内容をあえて資料に載せず、WS後に各自でチェックするように促されたのも研修として効果的だったと思います。



事例報告(1)「HARPとHARP参加館の実践」
(広島市立大学附属図書館 中請真弓)
→ HARPで行っている勉強会の内容、各参加館の担当者人数など、具体的な話を聴くことができました。



事例報告(2)
「新潟県地域共同リポジトリ「NiRR」参加館からの報告」
(国際大学松下図書・情報センター 森山俊行)
→ NiRRの運営体制や、参加館の一つである国際大学の具体的な業務の流れや事情を聴くことができました。



開会あいさつ
(信州大学 附属図書館長 笹本 正治)
→ 信州地区の学術情報が広がるように、信州大学が全面的に協力するとの力強いお言葉をいただきました。



趣旨説明
(信州大学附属図書館 郷原正好)
→ 共同リポジトリの目的は各機関の成果物の発信だけでなく、共同リポジトリを通して各機関が協力しあえるようなパートナーシップの構築や交流も含むという言葉が印象的でした。



実務説明
(信州大学附属図書館 岩井雅史)
→ 具体的な費用やシステムの説明から、今後のスケジュールや日々の業務内容まで参加者が知りたいと思うことが全て触れられた内容でした。

9月21-22日 DRF-Tech in Kagawa (香川大学)

全体プログラム

- 9/21(火)
*13:30- 開会
*13:40- なぜ「リポジトリ」なのか(前田信治・永井一樹)
*15:00- メタデータ・ハーベストなど基礎知識(森保信吾)
*16:15- みんなで語ろうーリポジトリのこと(北村多樹子)
9/22(水)
* 9:00- 電子化実習(大園隼彦)
*10:45- コンテンツ登録実習: DSpace(森保信吾)
*13:30- コンテンツ登録実習: E-repository(濱知美)
*14:45- アクセスログ解析(前田信治)
*15:50- なんでも相談会(土出郁子・前田信治)
*16:50- 閉会

ほとんど知識のない状態での参加でしたが、わかりやすくとても参考になりました

また次も参加したいと思いました

楽しかったです



こういった実習付きの技術ワークショップは是非定期的に行いたい

気をはらずにみなさんと意見交換ができてよかった

今回のような技術的な内容で実習もできるのはありがたい



「なぜ『リポジトリ』なのか」

前田信治(大阪大学)永井一樹(兵庫教育大学)



「教員」「大学」「学術情報の流通」「大学図書館」「図書館員」の5つの視点から、機関リポジトリ事業を進める意味について語る。機関リポジトリは「製麺所型」出来たてをその場で提供できる?



「メタデータ・ハーベストなど基礎知識」

森保信吾(広島工業大学)



世界中からアクセスされやすい機関リポジトリを作るにはメタデータ設計が大事! 内部メタデータは自由に不足なく設計し、外部への提供用メタデータは標準仕様で設計しましょう。

「みんなで語ろう」

北村多樹子(高知工科大学)



疑問も不安もみんなで解決。失敗談もお役に立ちます?!

「なんでも相談会」

土出郁子・前田信治(大阪大学)



「電子化実習」大園隼彦(岡山大学)

紙の論文原稿から、実際にPDFファイルを作成する実習。PDFを作成するために必要なソフトは?



論文に最適なPDFを作る設定は? 検索されやすくなるために、透明テキストを付加したPDFを作る。

「コンテンツ登録実習」※協力: UsrCom

DSpace: 森保信吾(広島工業大学)



UsrComを使って、実際の機関リポジトリにメタデータを登録。書誌登録より簡単かも…?



E-repository: 濱知美(広島大学)

「アクセスログ解析」前田信治(大阪大学)



機関リポジトリに登録された論文がどれくらいダウンロードされているか? アクセスログから、ロボットや事務処理でアクセスしたログを除いていくと…? とどどん減っていくアクセスログ数に、息をのむリポジトリ担当者も。

DRF技術ワークショップ軽井沢



平成22年9月15日～平成22年9月18日にかけて、DRF技術ワークショップ軽井沢を開催しました。目的は国内IRコミュニティへの技術面からの貢献で、国立情報学研究所軽井沢セミナーハウスで合宿形式でおこないました。そこで取り組まれた課題を紹介します。なお、これらの課題については、現在10月15日には全課題についての成果公開を目指し、ドキュメントを鋭意作成中です。(以下のページで順次公開していきます。 <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFtech-Karuizawa2010>)

取り組まれた課題

☆マニュアル作成

インストールマニュアル

DSpace1.5.2 インストール手順の文書化 / eprints3.2.4の構築マニュアル作成

その他のマニュアル

UsrCom登録手順・管理者手順マニュアル作成 / CakePHPとの連携

ハーベスタの検証

☆レポート作成

研究者総覧ツール

リポジトリ連携研究者総覧のオープンソースシステム(BibApp)インストール方法確認

顧客関係管理(CRM)システムの「SugarCRM」をインストール・試用。

☆ツール作成

junii2 チェックツール / URLのリダイレクト / IRサーバ負荷状況の可視化

文献提供用Webフォーム / DSpace外付け紀要用EJ風ページ

NDL提供学位論文(博士)デジタルデータの登録補助ツール / PDFチェックツール



<参加メンバー>

野中 雄司 (北海道大学)	堀越 邦恵 (室蘭工業大学)	高久 雅生 (物質・材料研究機構)
土出 郁子 (大阪大学)	大園 隼彦 (岡山大学)	上田 大輔 (広島大学)
深川 昌彦 (山口大学)	徳安 由希 (九州工業大学)	

関連
メーリング
リストから

オープンアクセスは義務化されるべき？

[drf:1982] JAIRO (Japanese Institutional Repository Online) : 今月、内島さん(金大)が英国メーリングリストJISC-REPOSITORIESへ、JAIROコンテンツ100万件突破の紹介をしたことがきっかけで、米国のメーリングリストASOAF(american-scientist-open-access-forum)で激論が交わされています。

超訳ダイジェスト

内島:「日本の機関リポジトリ158からハーベストしているJAIROのコンテンツが100万件を超えたんだぜ。フルテキストは70万件に達してるよ。」

ハーナッド:「おめでとう。これを機に、日本も義務化を促進したらどうなのかな。」

AAアダムス(明治大):「オープンアクセスウィーク中、小樽商大と北大が義務化採用とIR登録を推進する講演会を開くんだけど、両方に招待されてて喋るんだよね。」

土屋:「日本のリポジトリコミュニティはゴールドや義務化路線じゃなくて、ボランティアに教員を支援する方向だ。第一、僕は義務化されるからオープンにするじゃなくてオープンにしたいから投稿するね。」

オープンアクセスウィーク(OAW)に参加しよう！ 10月18日～24日

学術研究の成果をインターネット上でひろく発信し、学術情報の自由な交流をめざす「オープンアクセス(OA)」。

OAについて各自の立場から認識を共有し、促進していく国際的な週間がオープンアクセスウィーク(OAW)です。今年のOAWは10月18日(月)～24日(日)と定められ、世界各国で様々な催しが行われます。



先生・研究者へのインタビューをしよう

DRFのOAバッジをもって、先生にインタビューをしに行きませんか。

先生と一緒にバッジをつけて写真を撮りましょう。

◎月刊DRF全プレ◎ 機関名、担当者氏名、メールアドレス、をお書き添えの上、問合先メールアドレスまでご連絡下さい。バッジを送らせていただきます。



研究者・学生の交流の場に△スタンドを

月刊DRF特別付録その1:OAの簡単な説明を載せた△スタンド(縦置き・横置き)印刷して折って止めるだけ！食堂など、多くの人の目にとまるところに置いて

OAを宣伝しましょう。縦置きものは1面分が空いており、自機関リポジトリの宣伝を入れることができます。(写真は、つくばリポジトリTulips-R)



ロゴを使おう

月刊DRF特別付録その2:DRFのOAロゴ

ラベルシート等に印刷してご自由にお使い下さい。紙コップに貼ればたちまちOAコップができます。

インタビュー記事、△スタンドやロゴの使用写真を、以下メールアドレスまでお寄せ下さい！インタビュー記事は後日DRF-wikiの「先生へのインタビューコレクション」ページからリンクさせていただきます。

- バッジプレゼント、OAWに関する連絡・問合先: oaw★ml.hokudai.ac.jp (★=半角@)
- DRFのOAWページ: <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?OAWWeek%202010>
- OAW国内まとめサイト: <http://cont.library.osaka-u.ac.jp/oaw/>

オープンアクセスウィーク(OAW)10月18日～24日



鳥取大学研究成果リポジトリ



鳥取大学研究成果リポジトリ

<http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/Repository/>



Q1. 担当課担当係と運営体制をおしえてください。

基本的には図書館情報課学術情報担当で運営しています。また、キャンパスが離れている医学部に関しては医学情報担当にいろいろお願いすることもあります。ただ雑誌業務や利用者教育等も担当しているので、なかなかリポジトリに手がまわらないのが悩みです。それでも今年度は予算がついて派遣職員の方を1人雇っているので、まだいい方なのかもしれません。

Q2. 導入システムは何ですか？

Earmas(アーマス)です。少数派ですが、特に不満はないです。

Q3. 公開時の苦労話や秘蔵話、他機関と違った活動などをぜひ。

立ち上げ前にNIIのCSI委託事業の公募に2年連続落ちてしまい、大学浪人/就職浪人時代の気分を思い出しました。それでもなんとか学内で予算を確保して、2009年3月に無事立ち上げることができました。CSI事業は昨年度は合格(?)したのですが、報告書の作成がまた大変でしたので、初めての所は余裕をもって準備しましょう。

Q4. チャームポイントは？(ここが気に入ってるといったところを)

システムのいろいろ融通がきいてカスタマイズできるところでしょうか。

Q5. DRFに期待することは何ですか？

リポジトリの裾野をひろげるような活動を続けてほしいです。

次号
予告

【特集】OAW大特集

編集後記：今月は2ページ増(どうにも4頁に収まらなかった)で、特別付録つきになっちゃいました(み)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

月刊DRF第8号 平成22年9月30日発行 デジタルリポジトリ連合